25巻2号　平成6年3月

東京大学
大学院理学系研究科・理学部
廣報

表紙の説明

平成５年度から理学部新１号館の建築計画がスタートした。現在，始まっているのは現１号館の安田講堂側のおよそ３分の１を取り壊し，地上12階，地下２階の新１号館１期分を建築する工事である。この部分の建物面積は約17,000平方メートルであるが，新１号館全体の建物面積は46,000平方メートルあり，現在の１号館の12,000平方メートルが置き換えられる。

新１号館の建築は理学部の悲願であった中央化構想の第１段階と言えるものである。理学部の建物は現在著しく分散していて，１号館，４号館，７号館と化学館は弥生門地区にまとまっているが，２号館は赤門地区に，３号館は浅野地区に，５号館は竜岡門地区にと点在している。特に，学問的な分野が近い生物化学専攻と生物系３専攻（動物，植物，人類）が３号館と２号館に分かれ，地球惑星物理学専攻と地球科学系の３専攻（地質，鉱物，地理）が３号館と５号館に遠く離れている。理学の分野において今後ますます重要となる学際的な研究，教育の活性を高め，新しい研究分野の発展に寄与するためには，理学部の研究教育機能とその支援機構を集中化させることが是非必要である。また，大学院重点化のために増加した大学院生や外国人留学生のための建物面積は，今まで全く考慮されておらず，研究環境の改善が必須な状況であった。新１号館の完成はこのような研究・教育環境改善の目標にむけた第１歩である。新１号館完成に続いても理学部中央化への努力は続ける必要があり，最終的には１号館地区と現在の生協第２食堂の建物周辺に理学部・理学系研究科のほとんどの機能を集中させ，また浅野地区には共通の実験施設を建築する構想である。この理学部の計画は本郷地区のキャンパス整備委員会の整備計画にのっとったものである。

新１号館は，先に述べたように第１期分約17,000平方メートル，第２期分約29,000平方メートル，合計46,000平方メートルを２期にわたって建築する。第１期分の完成は平成８年度が予定されている。このように２期に分けて工事をする必要があるのは，新１号館の建物が現１号館の敷地に立てられるために，現在の１号館にすむ住人も含めた建物面積を常に確保するためである。建物の全体は図に示すように３棟で構成されているが，この３棟は勿論１体として機能するようにブリッジで連結され，同時にアトリウムや通り抜け空間が形成される。新１号館の設計にあたっては，全体の建物面積の内で実際の部屋面積を増やすことを考慮した，かつ，窓のない使いにくい部屋を少なくする必要があり，アトリウムは実験室に採光をもたらすと共に，自然のドラフトとして機能し，各室の環境維持に寄与している。３棟の高さは，最も安田講堂よりのブロックが地上12階，真ん中のブロックが地上10階，ロータリー側のブロックが地上８階となっている。この高さの違いは周囲への日陰の規制を考慮したものであり，現在の建物の容積はほぼ最大限のものと考えられる。

建物内部の配置は地下２階と地下１階は振動を嫌う実験室や重量物のある実験室で占められている。地上１階と２階は共通の施設や理学部中央事務が入るが，特に研究科共通の講義室や会議室，そして協力講座の教官や大学院生のための部屋も用意されている。３階以上は各専攻，学科が使用する。部屋の配置の基本設計は南側と北側の部分は居室として考え，真ん中の東西に面した部分は大きな部屋を多くし，実験室，計算機室等に使えるようになっている。第１期の建築計画はスタートしたが，２期分以降の計画は未定の部分があり，今後も引き続いて検討していく必要があろう。

濱野洋三（地球惑星物理学専攻）